

「2つの120年」

北海道函館聾学校 校長 門 眞 義 弘

本校にかかわる2つの120年についてご紹介します。本校にかかわる2人の人物についての120年です。皆さんも当時の様子に思いをはせてみませんか？※本校の歴史動画をHPで公開中です。

◎ 篠崎清次先生の120年

本校は、明治28年に米国宣教師の母堂様であるシャーロット・ピンクニー・ドレパー氏によって創立された函館訓盲会から数えて令和4年度に127年目を迎えました。創立当時は視覚障がいのお子さんのみでしたが、はじめて聴覚障がいのお子さんを受け入れたのが、自らも視覚に障がいがありながら本校（函館訓盲会）で学んだ篠崎清次先生の熱い思いからでした。後の初代校長となる篠崎先生は、函館訓盲会の方がキリスト教徒として生活する姿を見て大いに心を動かされ、自らもキリスト教や障がいのある子どもの教育に一生を捧げようと決めたそうです。



篠崎清次 先生

明治35年（1902年）のある日、母親に伴われて男の子がやってきました。その子は、4歳の時に急性脳膜炎のため聴力を失ってしまったとのことでした。母親から懇願された篠崎先生は、その子を含めて2名の聴覚に障がいのあるお子さんを受け入れています。そのときから数えて、令和4年度が120年目の記念の年となりました。

聴覚に障がいのあるお子さんを受け入れるのは初めてでしたので、手探りで教育の開始となりました。篠崎先生は、東京に勉強に行き、学んだことを基に聴覚障がいのお子さんの教育を続けました。北海道の函館から東京に行くだけでも何日もかかった時代ですので大変な決意だったことでしょう。その後、篠崎先生は20代前半にして明治37年に函館訓盲院の3代目院長となり、本校の初代校長となりました。当時の学校の運営は大変で、学校の仕事の傍らで針治療を行うなど、苦勞されていたようです。

実は、そのように初めて受け入れて教育したお子さんが後の室蘭聾学校初代校長となる辻本繁先生でした。きこえない校長先生は全国でも希なことで誇らしい歴史です。この教育に向き合う精神を我々は受け継ぎたいと思います。



辻本繁先生を中心に言泉学園の子どもたち（室蘭聾学校50周年記念誌より）

◎ ヘレン・ケラー氏の120年

ヘレン・ケラー氏は、見えない、聞こえない、話せないということ乗り越え、障がい者教育や福祉の発展に貢献したアメリカ人女性です。22歳の時（明治35年、1902年）に自伝を発表し、障がい者のために講演をしたり本を書いたりする活動を始めました。その年から数えて令和4年度が120年目の記念の年となりました。



ヘレン・ケラー氏

日本には、昭和12年に初来日しており、函館にも立ち寄っています。



函館にいらしたときには、日本文化を知ってもらおうと、神社やお寺の建物の模型を作り、触ってもらうことで函館の事を伝えようと努力したようです。

その模型は長く函館聾学校の寄宿舎に置かれていましたが、寄宿舎が休舎になったことを期に、函館盲学校に移されました。

また、ヘレン・ケラー氏に書いてもらった色紙には、きれいなサインが書かれています。文字間隔が均一に書かれていること、横一線にまっすぐ書かれていること、全体のバランスがとれていることなどから、ヘレン・ケラー氏がいかに努力された方が想像できます。

神社の模型の写真や、色紙は、本校に飾られているものです。じっくり観察してみたり、目を閉じて、自分の名前を書いてみたりと、ヘレン・ケラー氏の思いを想像してみてください。大変さが少しだけ分かるかもしれません。

